

[共同研究]

女性のことばと世代

遠藤 織枝 小林 美恵子
高崎 みどり 三井 昭子

— はじめに —

近年、女性のことばが中性化して、男女のことばの差がなくなってきたとよく言われる。1990年にNHKが首都圏で行った世論調査によれば「近頃のことばづかいで感じることは何か」という問いに対して60%の人々が「女性のことばが荒っぽくなった」と回答したとのこと。同じ質問を試みた過去4回の調査で、この回答は常に3位以内にランクされているともいう。NHKによれば「女性のことばとは言っても、特に若い女性のことばの荒っぽさが目の敵にされているらしい」とのことである。(注)

次に掲げる投書は1992年11月2日の朝日新聞・テーマ討論「日本語の乱れ」に紹介された意見の一つである。全体に非常に感情的な筆致であり、ここで言う「男言葉」や「女言葉」がどのようなものであるのかもはっきりしないが、この筆者の言う「女性の男言葉」が、NHKによる「女性のことばが荒っぽくなった」とされることばと通ずるものであるのは論を待たないだろう。

投書の筆者は若い女性の「男言葉」を苦々しく思い、「いったい親や先生はどういう育てかたをしてきたのか」と嘆く。さらにその母親ぐらいの年代の女性までもが「男言葉」を使っているのを聞き「なげかわしく、教養の程度を疑った」と怒っている。

「若い」女性のことばの荒っぽさを漠然と感じている人は確かに多いのだろうが、その「若さ」とはいったい何歳ぐらいまでを言うのか——投書の筆者の言う「若い女性の母親ぐらい」の年代の人々でも、言語に対する感性の面では、あるいは「若い世代」であって、59歳の投書者とは一線を画されるべきなのかもしれない——また、特に現在のように情報量の多い社会において家庭（親）の教育力がどれほどに機能するものなのか、この投書には世代

とことばのありように関する興味深い問題が含まれているように思われる。投書者の感情的な思い込みや糾弾に直接こたえようというわけではないが、この春以来、進めてきた今年度の共同研究がなんらかの回答になるかもしれない。

味気ないです 女性の男言葉

東京都 男性（自由業59歳）

若い女性が幼稚言葉、しり上がりのあまったれたものの言い方に加えて、最近では男言葉まで使い出した。

男言葉でしゃべるのはまだしも、「あいつ、なにねぼけてやがんだい。ばーけやろう。ふざけんじゃねーよ」など、汚い言葉をしゃべる女の子もいて、いったい親や先生はどういう育て方をしてきたのだろうと思ってしまう。

ところが、その母親ぐらいの女性が、率先して男言葉を使っている。テレビでは、ある女性の大学教授までが、男言葉を得意になって使っているのを見て、なげかわしく感じ、教養の程度を疑った。

男女同権だから、言葉までも男並みにと力んでいるのか、あるいはマスコミの影響による一時の流行なのか、判断がつきにくい。が、どちらにしても、男の側から聞いていると、木に竹を接いだような、砂をかむような味気なさを感じられる。すっぱいリンゴを食べているように、歯が浮く。

日本には魅力的で愛すべき女性独特の言葉がある。もし外国から来た女性に男言葉を教えてしまったら、取り返しのつかない日本文化を覚えさせることになりかねない。

逆に、男性が女言葉をぺらぺらしゃべったら、女性は気持ち悪いと思うに違いない。男言葉を使うなら、ついでに「ふんどし」でもおつけになったら。

(1992. 11. 2 朝日新聞)

さて、今年度は特に女性の話しことばに関して、言語使用の意識の世代差

や、世代を越えて共通するもの、また世代から世代へと引き継がれていくものをあきらかにしたいと考え、共同研究として取り組んできた。

このような話しことばの調査に際しては信頼できる言語資料が何より研究の支えとなる。しかし現実的には何世代かの女性が自然な状況の下でかわす会話の資料を得ることは非常に難しい。そこで今回の共同研究においては、研究のための資料の作製（会話の場の設定・録音とその文字化）を一つの柱として小林が担当し、その資料を用いての分析研究を他の3人がそれぞれ行うという形をとった。

資料採集の方法としては、文教大学で日本語教育を専攻する学生、鈴木清美さんとその祖母・母、内藤晶子さんと曾祖母・祖母・母それぞれのご家族に、ことばに関するいくつかの問題を提起して、約2時間の話し合いをしていただき、これを録音したものを一定のルールにしたがって文字化した。文字化のルールと実際に文字化したものについては後に掲げる『資料・女性のことばと世代 — 鈴木さん一家 —』（以下『資料』とする）を参照されたい。この資料については多方面からの研究が可能であろう。今回はスペースの関係もあり1家族のみの紹介となったが次号には内藤家の資料も全文掲載する予定である。お読みになった方々に自由に研究にご利用いただければ幸いである。

次に調査に協力いただいた2家族を紹介する。それぞれの名の次に記した(K)(Y)などの記号は、以下の論文中に用いる氏名の略号である。

鈴木清美さん一家（S家）は板橋区に住んでいる。家族は父方の祖母・父・母・一歳年上の姉（大学生）の5人。お話を伺ったのは次の方たちである。

- ・鈴木清香さん（K）……祖母、82歳、東京出身、青山学院女学校を卒業後専門学校に進み保母となる。結婚後退職し、1男2女を育ててる。
- ・鈴木智恵子さん（C）……母、清香さんの長男の妻、53歳、東京出身、都立高校を卒業し、会社勤めの後結婚退職、2女を育てる。夫は会社員。
- ・鈴木清美さん（M）……清香さんの孫、智恵子さんの娘、20歳、区立中、都立高校出身、大学3年。

資料の収録にあたっては板橋区のご自宅を小林が訪問し、清香さんの居間でお話を伺った。

内藤晶子さん一家（N家）は、鈴木家と違い、母・母方の祖母・母方の曾祖母と4代直系の女性たちである。晶子さん一家（父・母・晶子）は千葉に、祖母は横浜市鶴見区に、曾祖母は祖母とは別に、夫や息子一家と鶴見区内にと、3ヶ所に別れて暮しているが、この日は祖母宅に集まってお話をして下さった。また、晶子さんの父、内藤昌夫さんも同席された。以下にそれぞれを紹介する。

- ・望月よねさん（Y）……曾祖母、88歳、山梨県出身。小学校卒業後、紡績工場に勤める。15歳で横浜へ。数年をすごし同郷の大工と結婚、出産後甲府市へ戻り、さらに10年後再び横浜へ。1男3女を育てる。また30代～40代の16年間、山梨特産の水晶細工や印伝製品などの販売に従事した。
- ・遠藤秀子さん（H）……祖母、よねさんの長女、65歳。幼児期より小学校3年まで甲府市で暮らす。以後横浜在住。山梨出身の鉄道員と結婚、1男1女の母。結婚前は母の仕事を手伝っていた。夫とは5年前に死別、現在は鶴見区内で1人暮らしをしている。
- ・内藤由比子さん（U）……母、秀子さんの長女、45歳。横浜市内の私立高校卒業後、東京で銀行に勤めた。結婚退職し、千葉県八千代市に移り住む。子供は晶子さん1人。娘が中学生のときからヨガ教室を主宰し、生徒に教えている。
- ・内藤晶子さん（A）……娘、由比子さんの長女、20歳。都内の私立女子中高出身、大学3年。
- ・内藤昌夫さん（N）……由比子さんの夫、晶子さんの父。49歳。東京出身。会社員。

話の進行、聞き手は鈴木家の場合と同じく、小林が行った。

話し合いに際しては、次のような題材を用意したが、実際にはテーマは単なるきっかけとしてあまりこだわらず、自由に話し合ってもらうように心がけた。

- ・各人の自己紹介

- ・家族間で互いにどう呼び合うか。
- ・互いに他の世代のことばづかいについてどう感じているか。また自分のことばは他の世代と比較してどうか。
- ・ことばのしつけをしたりされたりしたか。またそのことについてどう考えるか。
- ・女性らしいことばとはどういうものだと考えるか。

さらに次に掲げる3点については資料等を用意し答えてもらうことにした。

- (1) 写真①～④を見て感想を言ったり、形容をしてもらう。(写真については『資料』参照)

- ①若い女性の振袖姿
- ②中年の女性の和服姿
- ③若い女性、ミニキュロットパンツのカジュアルな姿
- ④若い女性、ブレザーコートにパンツ

- (2) 女性に対するインタビューを録音したテープ3種を聞き感想を述べてもらう。(インタビュー内容については『資料』参照)

- ④森英恵(60代、デザイナー)
- ⑧宮崎美子(30代、女優)
- ⑨関口典子(30代、映画監督)

- (3) 同一の内容について、相手によってどのように言うか。

- ①家族それぞれに対して食事の準備ができたことを知らせる場合
- ②家族それぞれに対して手近にあるものを取ってほしいと頼む場合
- ③同年配・同性の親しい友人に、電話で明日会いたいけど都合はどうかと聞く場合
- ④家族の会社の上司、学校の先生など、ややあらたまった関係の相手から電話が来た。本人は不在なので帰り次第こちらから電話する旨相手に言う場合
- ⑤訪問セールスに断りを言うときのことば

- (3)については質問者(司会)のことばづかいなどが混入することがないように、質問用紙(『資料』参照)を用意し、これを見ながら、回答は口頭でと

お願いした。

これらの質問を通して、それぞれの世代が同じことやものを表現するのに、どのようなことばの違いを見せるのかを調べたいと考えた。また同時に、話全体の流れや、そこで使われていることばの様相をも記述することとした。

ここで語られる話題そのものは、日常生活における普通の会話ということから見ると、いささか特異なものかもしれない。また家族の会話ということから言っても、司会者という異質な存在によって、ふだん家庭の中で、家族だけが行っている会話とは違った面も持つと考えられる。しかし、初対面だが、それほどに畏まる必要はない客を迎えて、家族が語り合うという場面としては十分に自然な雰囲気で行われた座談であったと思う。どちらのご家族も司会者を単なる研究調査者としてでなく、一家の客として暖かくもてなして下さった。また話に際しては司会者の意図や座談の目的を汲み取って、積極的に発言、話を展開して下さった。先にあげた質問などについても、聞かれる側から見るとかなり面倒なものだとも思われるのだが、快く協力していただけた。両ご家族には深く感謝する。

話し合いの雰囲気や会話の流れについては『資料』を参照されたい。この『資料』については前述のとおり、採録と文字化を小林美恵子が行った。またこれにもとづく分析は次のように担当した。

- | | |
|-------------------------|-------|
| ①女性の言語使用・言語観と世代差 | 遠藤 織枝 |
| ②話しことばの世代差 一終助詞と副詞を中心に— | 三井 昭子 |
| ③三代のことばと〈コ・ソ・ア〉 | 高崎みどり |

なお、共同研究全体の整理統一についても小林が行った。

以下各々の論文と、『資料』を掲載する。

(注)

『NHKことばのハンドブック』 NHK放送文化研究所編
1992. 日本放送出版協会